慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二ーチェの人間形成論における価値観・世界観の変容に関する研究 : 二ーチェの教育論および人間形成論の解明を目指して
Sub Title	
Author	内藤, 貴(Naito, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2006
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.62 (2006.) ,p.177- 179
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成17年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000062-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ニーチェの人間形成論における価値観・世界観の変容に関する研究

——ニーチェの教育論および人間形成論の解明を目指して——

内　藤　　貴

本研究の概要

本研究は，ニーチェの諸構想との連関を踏まえつつ Bildung 概念を分析し，ニーチェにおける人間形成論の基本的枠組みを浮き彫りにすることを目的として行われた。本年度は初期ニーチェに焦点を当て，Bildung を主題として扱った「われわれの教育施設の将来について」を中心に論究を進めた。ここでの論点を整理すれば，一方で同時代人に担ぎ上げられた一般教養に対しての批判という点であり，他方で新人文主義に親和的な Bildung 理念をそれに対置する点である。

ニーチェの陶冶（教養）論はギリシアの都市国家＝ポリスを理想としており，その陶冶論の主たる担い手として想定されていたのは貴族階級であること，および当時の現実においては人文主義的教育を行うギムナジウムを経たいわば少数のエリートが想定されていた点が確認された。ニーチェにおける Bildung 概念の人間形成的側面に関する性質に関しては，人文主義的な人間形成，すなわち後の表現を借りれば「その内面においてさまざまなが力（クラフト）一つの目標のために躊躇なく拘束に服しているような，偉大な総合的人間」を目指すものとして解釈できる。この背景には，ギムナジウムがドイツ教養市民層 (Bildungsbürgertum) のいわば再生産装置として機能し始めた当時の状況において，教養はギリシア的理想すなわち完成された人間に向けての内面化・総合化とは程遠い方向へと漸進しつつあるというニーチェの危機意識があった。また，国家主義の台頭により教養の目標をいわば政治的・社会的に限定された「国家主義」へ方向づけようとする強力な磁場が形成され始めた点や，大衆ナショナリズムの台頭による教養の世俗化・一般化の傾向も，ニーチェの目には訝しいものとして映っていた。すなわち，ニーチェの陶冶（教養）論が人文主義（新人文主義）の陶冶（教養）論と呼応するのは，一方で教養市民層の再生産において形骸化したいわば「箔づけ」でしかない教養を批判し，他方で教養の目標を政治的・社会的に規定しようとする政治的（あるいは時代の）圧力に抗った上で，人間形成すなわち教養の理想を人間の内面化・総合化に求めようとする姿勢においてである。

啓蒙主義によってもたらされた合理主義的・主知主義的な教養に対して批判的である点，教養俗物批判を通じて教養概念を捉え直しギリシア的な人間形成作用に信頼と希望を寄せる姿勢等を考慮すれば，基本的に新人文主義が目指した Bildung 概念の系譜に引き寄せることができよう。しかし新人文主義が新たなドイツ国民文化の創造へと理想の射程を見定めていた一方で，ニーチェは自らの時代認識においてその理想が同時代の社会的現実の中で実現されるとは考えていない。すなわち，近代化されつつある社会状況に対する態度に顕著な温度差があるということである。

新人文主義が目指した教養は，19 世紀初期においては実現されるべき目標であり，近代的な国民国家形成の中に古代的な教養理念の豊穣さをいわば接木しようとしたものであった。しかしニーチェの教養論においては，近代的国民国家に対する幻滅がすでに前提とされているのであり，古代ギリシア的社会でかつて実現に至った理想的教養は，ニーチェの生きた時代状況とはあまりにも距離が遠く，19 世紀初期のような接木の可能性など構想されてはいない。ニーチェは教養に関して強い理想を描くものの，自

身の時代認識によって，これを実現する場をいったん留保する。そしてこの教養理念を取り巻く社会的構想には，古代ギリシアを理想とする貴族主義（奴隷制）国家論が見据えられている。

すなわちニーチェと新人文主義との教養観については，親和性を持ちつつも緊張的関係にあることが明らかとなる。そして新人文主義的教養の前提としての教育的段階に関するニーチェの言及もまた，このような緊張的関係の中で読み解かれねばならない。

以上の考察を踏まえ，ニーチェの Bildung 概念の教育的時期に関する限定が説明されうる。ニーチェは教養を指向する精神的エリート育成論者として複線型の学校体系を支持したとされるが，他方で教養に向かうべき相応の年齢についても言及があり，教養に向かう以前の教育段階を含めた分岐型の構想を有していた。教養を指向する以前に，機会として平等に教育が与えられるべきであるとする。ニーチェにおける Bildung 概念は，人間形成論としては基礎的段階の教育を終えた後の概念として示されている。また教養を「紛れもない芸術への欲求」とし，「教養の使命は天才を完成させること」と言うニーチェは，古代ギリシアの理想的人間像への憧憬を Bildung 概念に含ませ，芸術的天才を文化の中で形成することを「知的カースト制」とも表現している。理想社会の構想においては貴族的階級と隷属的階級を区別しつつ，隷属的階級の人間形成にも「教養目標」を想定するなど，いわば階級社会の「形成」もまた Bildung 概念の一側面に挙げることができる。このようにニーチェの Bildung 概念は，同時代の大衆化した一般教養への批判によって人文主義的教養の意義を説いたという点にとどまらず，教養が実現される場としての階級社会の構想とも結びつくものであり，また他方で複線型学校体系の不公平性を考慮しつつ義務的教育段階を前提とするなど，人間形成論としては教育の初期段階から想定されるものではなかったと言うことができる。

この教養のギリシア的な豊かさを至上のものとして評価する初期ニーチェにおいて，古典ギリシアの都市国家社会，すなわち前近代的な奴隷制度を持つ貴族社会以外にそのような教養が実現する場を構想しえなかったのであるが，このことは先天的階級区別の再生産を意味してはいなかった。教養を一般的教育の上に成り立つものとして理解するニーチェは，この階級区別が教養を目指すものと目指さないものとの間の差によるものとした。この教養観は，教育によって人間が自然による形成から脱自然・人為的形成へと導かれることによって保証されるものとして理解される。

近年，自己形成論や超人論，あるいはアフォリズムに織り込まれた哲学等，主としてニーチェの後期思想に関心が集まる中で，人間形成に関するニーチェの議論を全体として見るならば，Bildung の前段階としての教育が構想されていたという点は一考に価する。いわゆる「脱構築」論的に援用されがちなニーチェ思想ではあるが，「構築」的な人間形成論モデルが（主として前期思想の）Bildung 概念の中心にあり，後期思想において展開される人間形成論の脱構築的側面に対する前提として暗示されていると言えよう。すなわち「自己を乗り超えていく」という自己形成には，乗り超えられるべき自己に至るという過程が含まれているということにほかならないのである。

以上の研究成果は教育哲学会における口頭発表および三田哲学会の雑誌『哲学』掲載論文にて示された。本年度の研究を踏まえ，社会史的背景の検討をさらに精緻なものとし，中後期ニーチェ思想へと射程を伸ばし論究を進めることが今後の課題である。

追　　記

研究成果のアウトプットを以下に示す。

・口頭発表 「ニーチェの人間形成論における思想構造—Bildung 概念の分析を通じて—」教育哲学会第 48 回大会（於香川大学），2005 年 10 月.

・図書紹介「曽田長人著・『人文主義と国民形成—19 世紀ドイツの古典教養—』」『ディルタイ研究』第 16 号，2005 年 11 月，pp. 192-199.

・掲載論文「初期ニーチェにおける陶冶論と教育論—Bildung 理解を中心として—」『哲学』第 115 集（慶應義塾大学三田哲学会），2006 年 2 月，pp. 1-23.

主要参考文献

Karl Jaspers, *Nietzsche.-einführung in das Verstandnis seines Philosophierens*, Berlin, 1936. Nachdruck (Berlin, 4. Auflage, 1974.)

曽田長人『人文主義と国民形成—19 世紀ドイツの古典教養—』知泉書館，2005.

Fritz Ringer, *Fields of Knowledge. French academic culture in comparative perspective. 1890-1920*. Cambridge University Press, 1992.

加藤守通「薬としてのロゴス—西洋教育史におけるレトリック・ヒューマニズム的伝統の再考」『近代教育フォーラム』(11), 2002.

三輪貴美枝「Bildung 概念の成立と展開について」『教育学研究』61(4), 1994, pp. 353-362.

野田宣雄「ドイツ教養市民層の諸問題」『法学論叢』132 巻，京都大学法学会，1993.

H・アーレントの政治哲学における教育の位置について

朴　順　南

研究目的

本研究は，政治的人間という人間像を土台とする H・アーレントの哲学の中で，教育という営みの置かれる位置を明らかにし，最終的に彼女の遂行した伝統的ヨーロッパ哲学批判の文脈において教育にどのような役割の変化が生じるのかを検討することを目的としている。アーレント研究はこれまで，主に政治哲学・思想研究の文脈で盛んに行われてきており，近年では関連諸分野でも研究の気運が高まりを見せている。しかしその反面，多くの研究はアーレントをあくまで狭義の政治哲学の文脈の中で取り扱い，必ずしも体系的なまとまりを持たない彼女の哲学全体の見取り図を正確に構築する作業はいまだ成し遂げられていないと言える。彼女の哲学の根本的基礎にある「政治」概念自体が，今日に至るまで様々な解釈を通じて理解されてきており，その中には基本的な誤解を抱えたものも少なくないのが現状である。アーレントの主な文筆活動は 1941 年のアメリカ亡命後に始まり，彼女自身，哲学者ではなく政治学者と見なされることを望んだが，彼女のきわめてユニークな政治理論はヨーロッパの伝統哲学との徹底的な対決の中から生じてきたものであり，とりわけ若いアーレントに決定的な影響を与えたハイデガー哲学からの影響関係抜きには決して十分には理解されえないものである。残念ながらそうした意味での研究はいまだ十分になされていない。

本研究はそうした先行研究の現状の課題を踏まえた上で，アーレント哲学の源泉となっている伝統哲学批判および現代社会批判の文脈から説き起こし，その批判を近代教育思想の展開に重ね合わせなが